

わたしは助産婦

大谷タカコ

大谷助産院

毛利先生にバトンを頂いて、さてひとつ助産婦を離れて何か書いてみようなどと思ってテーマ探しをしたが、結局は26時中盆も正月もなく助産婦をやっている身にとっては、すべてが助産婦に帰ってしまう。井の中の蛙の繰り言になるかも知れないがお許しを乞う。

食はいのち

私たちは、健康であることを自分たちの生活の基盤としている。そのためには食べることが第一と、食生活にこだわりつづけている。最近の食事情は健康維持にはその選択が非常に難しい時代である。おいしいものが溢れ、何時でも何処でも口に入れることができる。三度の食事をきちんと摂って、バランス良く、毎日30品は食べようなどと人に言い、それを実行してきた私が、最近ちょっと迷っている。

先日、毛利先生のところでお世話になった方がお乳のマッサージに来られ、毛利先生のユニークな食事指導の話をしてくれた。その方は、「あなたは食べすぎだから朝食抜きにしろ」と言われ、朝食を抜いているとのこと。その結果、とても体の調子が良くなったという。

この話を聞いて、少々おなかの不調を抱えている私も早速朝食抜きに挑戦してみた。今まできっちり食べていたので昼まで我慢できるだろうかと心配したが、午後1時までの外来も平気で過ごし、何ともさわやかである。続けているうちに、おなか楽になり、便通もよくなって体が軽く感じるようになった。体重も1週間で1kg減った(5kg

くらいオーバーしているが)。私はやっぱり食べ過ぎだった。

1日1回の断食は胃の調子を整え、利尿作用が高まり浮腫がとれやすいなどと聞いていたが、確かにいい。しかし、食べることの好きな私は、つい気がゆるみ、おやつが多くなったり、食欲に負けて、またまた効果逆戻り。これを書きながら、また明日から気を入れて断食しようと意を新たにしている。

飽食過食は、特定の人の問題ではない。これだけ食にこだわってきた私自身が、過食という時の流れに乗ってしまっていた。妊産婦さんへの食事指導の難しさ。少し観点を変えて取り組まねばと、つくづく思う。

生と死

7月にわが家で姑が亡くなった。田舎暮らしができなくなった老父母は、子供たちのところへ出てきた。長男の家は共働き。次男坊のわが家は自営業のため一日中人が居るので、一緒に暮らすことになった。

姑は、若い時から自分を犠牲にして働きとおしてきた。そのためか、ひどい変形性膝関節炎で足の自由を失っていた。少し固くなった頭で、働けなくなったことを気にやみながら逝ってしまった。96歳のぢいちゃんを残して。舅は何でもよく食べ、テレビ・新聞に目を通し、ムリをせず生きてきた。「長生きのコツは？」と聞かれたりしているが、気ままに生きるのもその1つのように見える。

こうして老人を見ていると人は生まれる時と死



ぬ時は人の世話にならねばならないものなんだと思う。それも、できれば身内のものの世話がいい。図らずもうちの娘たちにとっても、小さい時に可愛がってもらったちいちゃん、ばあちゃんの老いと死を身近かに看取ることができて、ほんとによかったと思う。私も自分の老い先を見る思いである。いい死に方をしたいなど思うのにはまだ少し早い、生きざまは死にざまに凝縮されるのではないだろうか。そんな思いがする。

お 生いたち

“三つ子の魂百まで”と言うが、60年を生きてきた私も今にしてまだ、出生時のこと、子供の頃体験したことが何かにつけて判断基準になっていることに気づく時がある。

私は農家の4番目の四女に生まれた。今度こそは男の子と大きな期待をかけられていたらしい。それが“女”。母はがっくりきてか(そうではないと言っていたが)、しばらくして得体の知れぬ病になり、長い間ふらふらしていたらしい。お大師様(弘法大師)への信仰を持ってやっと元気になり、5番目に弟を産んだ。弟への期待は並のものではなかった。私たち娘どもは、家と弟優先で扱われていたような気がする。そして高校時代、自分の意志で生きていくためには自立できるものを身につけねばと、反対をおして看護学校へ行かせてもらった。

妊婦さんが、男の子が欲しいとか、女の子だったらもう1人産んでもいいけど、などと言うのを聞くと、私は内心ちょっとムキになって、「子供は

数でいかにくちあー。自分に産み分ける力もないのに。子供は授りもの。生まれてきたのが宝なんヨ」などといってしまう。みんなで誕生を待ち、喜んで迎えて欲しい。そして、慈しんで育てて欲しい。

私の父は慈愛深い人だった。叱られた記憶もないのに怖い存在でもあった。父を悲しませてはいけないという思いがいつもあった。母への思いは、幼い頃から弟との差別扱いに反発ばかりしていたので、ずいぶん大きくなるまで打ち解けぬものがあった。私も3人の娘を産んで下に行くほど可愛いなと思った時、母の気持ちを察することができて、ホッとしたのを思い出す。母の死に直面した時、「私は胎教だけはよかったんだ」とハッと気がついた。母に対するわだかまりが氷解し、心から、「お母さんありがとう」と感謝の言葉で送ることができた。

私は出産時記念写真を撮って贈っているが、これもその子の誕生を確かなものとして子供に伝えて欲しいという願いを込めてのことだ。親子が、家族が愛の絆で結ばれる一番最初、人の生いたちの出発点に関わっている助産婦は、なんとすばらしい仕事ではないだろうか。

* * *

バトンを、藍野看護短大で教鞭をとっていらっしゃる日隈ふみ子さんにお渡しします。いつも開業助産婦や自然分娩に深い関心を持たれ、毎年やる気十分な学生を助産婦学校へ送られています。大学院での女性史の研究もお進みのことでしょう。発表を楽しみにお待ちしております。